3.14　鐘の鳴る丘

♪　緑の丘の赤い屋根　　とんがり帽子の時計台
　　鐘が鳴ります　キンコンカン　　メーメー小山羊（こやぎ）も啼（な）いてます
　　風がそよそよ丘の上　　黄色いお窓はおいらの家よ

古い歌ですが、聞き覚えのある方もおられると思います。
この歌「とんがり帽子」は、昭和 22 年（1947 年）から 3 年余にわたって放送された菊田一夫のＮＨＫラジオドラマ『鐘の鳴る丘』の主題歌でした。

私自身は、このとき 0 歳。
ですから、このドラマがどんなものかを知ったのは、40 代になってからでした。
信州安曇野を訪れたとき、このドラマのモデルとなった施設のことを知ったのですが、そのとき､それまで私が持っていたこの歌のイメージが激変したことを今でも覚えています。

このドラマは、一人の若い復員軍人が、戦争で、両親を亡くし、孤児になった子供達と一緒に、信州に少年の家を作り、新しい生活を築き上げていく話なのですが、当時、こうした戦争孤児達は、何万人もいました。
彼らは、生き抜くために、ものを盗み、路上で寝起きし、残飯をあさっていたのですが、これを現実に目の当たりにしていた国民に、このドラマは訴えるものがあり、大きな衝撃を与えたようです。

このドラマのことを知った後､この歌を改めて聞くと､全く違ったものに聞こえてきます。
以下は、2 番から 4 番の歌詞。

♪　緑の丘の麦畑　　おいらが一人でいる時に
　　鐘が鳴ります　キンコンカン　　鳴る鳴る鐘は　父母（ちちはは）の
　　元気でいろよという声よ　　口笛吹いておいらは元気

♪　とんがり帽子の時計台　　夜になったら星が出る
　　鐘が鳴ります　キンコンカン　　おいらはかえる屋根の下
　　父さん母さんいないけど　　丘のあの窓おいらの家よ

♪　おやすみなさい　空の星　　おやすみなさい　仲間たち
　　鐘が鳴ります　キンコンカン　　昨日にまさる今日よりも
　　あしたはもっとしあわせに　　みんな仲よくおやすみなさい

明るい、どこまでも明るいこの曲に、私は、その明るさの分だけ、子供たちの精一杯のいじらしさと沢山の隠れた涙を感じざるを得ません。

報道によれば、今回の地震と津波で、両親を失った子供達は、数百人に上ると言われていますが、まだその実態はわからないそうです。

そのような中で、Ｒ製薬が、一時的にではなく、継続的に彼らに対する支援を行うことを表明しています。
売名と言われようと、なんと言われようと、何もしない多くの企業より、形だけの支援をするだけの政府より、私は、Ｒ製薬の行動を支持したいと思います。

今の政府が、今回、彼らに血が通った手を差し伸べるとは、私には思えません。
日頃から、社会貢献を口にしている企業の経営者達が、この子供たちに、「昨日にまさる今日よりも、明日はもっと幸せに」なれるよう、力を注いでいただければと思います。

既に退職して、たいした支援をすることもできない私ですが、たとえ僅かでも、手をさしのべたいと固く思っています。

7.25　椰子の実と二人の天才

♪　名も知らぬ　遠き島より　流れ寄る　椰子の実一つ
　　故郷の岸を離れて　汝(なれ)はそも　波に幾月

これは、誰もが知っている有名な「椰子の実」の冒頭部分。
この詩の作者は、島崎藤村。

明治 31 年、藤村の親友だった「柳田国男」（遠野物語で有名ですね）が、大学 2 年の夏、渥美半島の伊良湖に滞在中、波打ち際に流れ着いた椰子の実を拾うのですが、これを、藤村に語ったことが、この詩を生んだと言われています。

この後、わが国最高の民俗学者になる柳田は、この椰子の実から、日本民族の故郷を南洋の国々と考え、太平洋沿岸地域に広がる文化の共通性の研究に着手していくのですが（海上の道）、そのきっかけになったのが、伊良湖で拾い上げた椰子の実だったわけです。

今から 30 年も前のことになりますが、伊良湖の恋路浜で流木に坐って、神島を眺めた経験があります。
沖を大きな貨物船がゆっくりと横切って行く。
その先に神島灯台が陽炎に揺らめいている。
椰子の実が流れ着くにふさわしい美しい浜でした。

神島は、三島由紀夫の「潮騒」の舞台になった島です。
潮騒は何度も映画化されているのですが、私が見た頃のヒロイン初江は、吉永小百合。
古いですねぇ。山口百恵の初江と言いたいところなのですが。
下の写真は、恋路ヶ浜。左に霞む島が神島。

さて、一方、文学者の島崎藤村は、この椰子の実から、故郷を離れ、漂白の旅を続ける人生の旅人達（遊子）の「憂い」を、詩に託して歌い上げることになります。

♪　旧(もと)の木は　生(お)いや　茂れる　枝はなお影をや　なせる
　　われもまた渚を枕　孤身(ひとりみ)の　浮寝の旅ぞ

♪　実をとりて　胸にあつれば　新たなり　流離の憂
　　海の日の沈むを見れば　激(たぎ)り落つ　異郷の涙

♪　思いやる八重の汐々　いずれの日にか　故国(くに)に帰らん

ところで、藤村の詩の中の主人公である「われ」が、流れ寄る椰子の実を拾い上げた場所は、次のうちどちらだと思いますか？

①　伊良湖に代表される太平洋に面するわが国の浜辺。
②　わが国と同じように椰子の実が漂着する外国の浜辺。

実は、これ、どちらも主張されている方がおられるのですが、今では、②と考える方が有力なようです。
これは、最後の節の「故国(くに)」を文字通り自分の故国(日本)と解しているからのようです。

あなたは、どちらだと思っておられましたか？

しかし、それがどちらであろうと、私には
たった一つの「椰子の実」が、二人の天才によって、二つの大きな実りにつながったことが、奇跡としか思えないのです。

蛇足ですが、藤村は、親友柳田国男から聞いた話をそのまま詩にしたのではありません。
この椰子の実の歌が多くの方に愛されてきたのは、これが、漂泊する人生の旅人の心の憂いと故郷を思う心を、流れ着いた椰子の実に託して歌い上げたところにあると思います。

藤村は、森鴎外の訳詩集「於母影」の中の「思郷」の詩(ドイツの詩人カール・ボエルマンの作)と重ね合わせて、「椰子の実」を完成させたようです。

次に掲げるのは、鴎外の漢詩訳による「思郷」です。
「思郷」

離郷遠寓椰樹国	郷を離れて遠く椰樹(やじゅ)の国に寓(やど)る。
独有潮声似窮北	独り潮声の窮北に似たる有り。
思郷念或熾	思郷の念或ひは熾(おこ)り、
即走海之浜	即ち海の浜に走る。
聴此熟耳響	此の耳に熟(な)れし響を聴き、
欝懐得少伸	欝懐少しく伸ぶることを得たり。

9.15　黒田武士

♪　酒は呑め呑め　呑むならば
　　日本（ひのもと）一のこの槍を
　　呑みとるほどに　呑むならば
　　これぞまことの　黒田武士

これは、誰でも知っている黒田節(越天楽節)の一番。

歴史に詳しい人や福岡の人なら、黒田長政の使いとして、福島正則のところに赴いた黒田藩士「母里太兵衛」が、福島正則に勧められた大盃を見事に飲み干し、約束通り、天下の名槍「日本号」をもらい受けたという逸話に基づいた歌詞であることをご存じかと思います。

この逸話をご存じない方のために簡潔に申し上げますと、
母里太兵衛は、使いするに当たって、主君黒田長政から酒を飲むことを禁じられたため、福島正則から「この杯を飲み干したなら、なんなりと好きなものをとらす」と言われても固辞し続けるのですが、「この程度の酒を飲むことが出来ない腰抜け揃いの黒田家の侍」と嘲られ、
『此処で盃を干せば、殿に対し不忠の臣。飲み干さねば、殿の顔に泥を塗る。窮した時に黒田武士の摂る法は、唯一つ、腹かっ捌いて、殿の名誉を守る事こそなれ』
と、ついに福島正則の差し出した大盃を立て続けに飲み干し、日本号を手に入れるのです。
これぞ、日本の武士ですね。

さて、江戸時代以降、わが国では、母里太兵衛ほどではないものの、お酒大好き人間のことを「左党」或いは「左利き」といいます。
左党と言っても、どこかの国の元財務大臣Ｎ氏のような酔っぱらって記者会見するような方々とは関係ありません。

武士の場合、左手を弓手（ゆんで）というのに対して、(後掲「田原坂」参照。)
江戸の庶民の代表的な職業である大工の場合、左手を、鑿を持つ手、つまり「のみて」と言ったのだそうです。これが左党の由来のようです。

もっとも、江戸時代の武士がお酒を飲むときに不意の敵に備えいつでも刀を抜けるようにと右手を空けておき、左手で飲んだことからきているという説もありますけど。

蛇足ですが、酔っぱらって、ぐでん、グデンになって暴れる人のことを今日「トラ」と言って、不勉強なマスコミの記者たちは、タイガースのトラ、すなわち「虎」の字を宛てています。
元々「とら」というのは、寅の刻(午前 4～6 時)にあたる明け方まで酒を飲み続ける人のことなのですね。
ですから、酔っぱらって暴れる（タイガースファンのことでは決してありません）人を、「虎」と呼んでいるのは、正確ではないのです。
本物の「虎」さんに汚名を着せるなんてとんでもない！！のです。

寅の時刻まで飲んでも、母里太兵衛は、ぐでん、グデンにはならず、堂々たる「寅」でしたから。

え、分からなくなってきた？
酔っぱらっていませんよね。

ところで、黒田武士の二番の歌詞は、次の通り。

♪　**峰の嵐か　松風か**
　　尋ぬる人の　琴の音（ね）か
　　駒ひきとめて　聞く程に
　　爪音（つまおと）しるき
　　想夫恋

これ、平家物語の「小督」からの一節（古典の世界「小督の局」参照）。

高倉天皇と小督の悲恋の一節を、二番にしているなんて、黒田藩の武士たちは、間違いなく文武両道に通じた「粋」で、剛直で、立派な勤皇の人達だったに違いありません。

黒田武士、万歳　！！！

3.20　田原坂

♪　雨は降る降る　人馬は濡れる　越すに越されぬ　田原坂

これは、ご存じ、明治 10 年の西南の役で最大の激戦となった田原坂の戦いを歌ったものです。

地形的に言うと、田原坂は、ここを突破すると、熊本城までは何の障壁もなく、籠城する官軍を救出することが可能となる戦術拠点でした。
17 世初め、熊本城を築城した加藤清正公は、築城時点で、この田原坂が熊本城を守る上での最重要ポイントであることを指摘していましたから、軍事の天才であったことは間違いありません。

さて、この一番の歌詞は、その内容が正しいとすれば、この戦いの状況を幾つか端的に示していると考えられます。

まず、この激戦のあった期間(3 月 1 日～20 日)、雨が降り注いでいたことは、西郷軍にとってかなり不利であったと思われます。近代的な元ごめ銃を装備していた官軍に対して、一々火薬を装填しなければならない銃の多かった西郷軍は、雨によって随分苦労したと考えられます。

「♪　風よ吹け吹け、雨なら降るな、俺の火筒の火が消える」(田原坂の元歌 2 番)

次に、濡れているのは、人馬だけでなく、「陣場」でもありました。塹壕を掘って立て籠もっている西郷軍にとって、水浸しの塹壕の中で、草鞋履き、木綿の着物は間違いなく濡れそぼり、気力だけで戦っていたのではないかと思われます。
今、この一番の歌詞では、濡れるのは「人馬」と解されているのですが、漢字で書かれているのではないだけに、「陣場」と解する余地がないわけではありません。

♪　右手に血刀　弓手に手綱　馬上豊かな　美少年

これは、二番の歌詞。

私は、若い頃、「右手」のところを「みて」と読んでいました。
それが、馬手（めて）のことで、手綱を握る右手のことだと知ったのは、大学に入ってからのことでした。ついでに、弓手(ゆんで)が弓を持つ手、つまり左手であることも。

この二番の歌詞は、本来、手綱を持つはずの右手に刀を持ち、手綱は左手で握っています。
これは、騎馬による白兵戦の姿を示していることは明白です。

ところがです。
これが田原坂でのこととは考えにくいのです。
なぜ？

田原坂の激戦は、日中はそれまでに例のない激しい銃撃戦で、一日 30 万発を超える銃弾が飛び交いました。今でも空中で銃弾と銃弾がぶつかった「かちあい弾」が見つかるほどですから。だからとてもこの中で騎馬を使えるとは私には思えないのです。
白刃をかざしての敵陣への切り込みは、夜間に行われました。これは西郷軍の最も得意とするところでしたが、かつて賊軍の汚名をきた会津藩士などからなる警視庁抜刀隊が投入されて、形勢は互角となり、補給能力で上回った官軍が優勢になるのは時間の問題だったと思われます。

このような戦いの有様を考えると、田原坂における騎馬による白兵戦の余地はなかったと考えるのが妥当だと思われますし、実際に行われたという記録もありません。

では、この歌詞は？

この美少年は、西郷軍二番隊長村田新八の長男岩熊の姿を歌ったものという説、人吉藩士三宅伝八郎という説、西南の役を戦って散っていった多くの若い少年達を歌ったという説などがあります。

一般的には村田岩熊がモデルだとする方が多いようですが、私は、田原坂陥落の知らせを薩摩軍本営に知らせるため、馬上血刀をふるって、官軍の包囲を突破した三宅伝八郎が、この歌詞にふさわしいと思っています。

ところで、村田岩熊は、フロックコートがよく似合う父新八同様、若き開明派としてアメリカの海軍士官学校へ留学中でしたが、それをなげうって帰国、父とともに、西郷軍に参加し、田原坂で戦死しています。

日本は、西南の役で、我が国の将来を担ったに違いない多くの優秀な若い人材を失ったのです。

10.14　鉄道の日

今日は「鉄道の日」。
明治 5 年 10 月 14 日（旧暦 9 月 12 日）、新橋-横浜間 29.0 ㎞が全通し、明治天皇ご臨席の下、開業式が行われたことを記念して定められたもののようです。
下の写真は、1 号機関車。

翌日から始まった営業運行における新橋-横浜間の所要時間は、53 分。
新橋 8 時始発で、1 時間おきに、一日 9 往復したようです。

毎時ジャスト発にした理由は、市中に時を知らす鐘が正時にしか鳴らなかったから。
時計も携帯も持ってなかった時代ですからね。

しかし、開業から 8 年後に当たる明治 13 年の時刻表を見ますと、1 日 13 往復に増えて、15 分発、45 分発が出ています。
乗客がうなぎ登りに増えて、正時発だけでは間に合わなくなったのと懐中時計の普及が背景にあったのですね。

運賃は、三段階に分かれていて、
一番安い下等が 37 銭 5 厘、中等が 75 銭、上等が 1 円 12 銭 5 厘。
下等は、今のお金に直すと、2000 円～5000 円くらい？
普通の庶民では、なかなか乗れませんね。

運賃は、今と同じ先払い。
「鉄道略則」の**第一條**(賃金之事)では、
　「何人ニ不限鐵道ノ列車ニテ旅行セント欲スル者ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ルヘシ然ラサレハ決テ列車ニ乗ル可ラス」
切符は、「手形」と呼ばれていたのですね。
日本最初の切符は、イギリスのエドモンソンが考案した「Ａ型券」といわれる硬券で、大きさは、3×5.75 ㎝。

今は、硬券は珍しくなってしまったけれど、戦争中に節約のために作られたＢ型券を除い

て、我が国の硬券の主流はこのときに決まりました。
昔、電車ごっこで、オモチャの硬券にパチリと鋏を入れるのは気持ちが良いものでした。

今、硬券はほとんど姿を消し、裏に磁気記録ができるロール紙券になってしまいました。

これは、仕方がないことだと思います。
ただ、一つ残念なのは、私の好きな歌の一つ、中島みゆきさんの「ホームにて」の歌詞のイメージが変わってしまったことでしょうか。

♪　涙の数　ため息の数　溜まってゆく　空色のキップ
**　　ネオンライトでは燃やせない　ふるさと行きの乗車券**

ところで、余談ですが、鉄道を歌った明治の歌の代表選手は、誰もが知っている鉄道唱歌。

♪　汽笛一声　新橋を　早我が汽車は　離れたり
ですね。

これ、第１集（東海道編）から第５集（関西・参宮・南海編）まであって、全部で 334 節からなる膨大なものというだけでなく、
歌うだけで全国各地の観光、物産、名所その他多くのことを学ぶことができる、優れたものでした。

ただ、私には、高校生の頃、読んで、よくわからないところがありました。第１集第３節の品川。

♪　窓より近く品川の　台場も見えて波白き
**　　海のあなたにうすがすむ　山は上総か房州か**

この「海のあなたにうすがすむ」の部分は、何を言っているのだろう？
「うす」ってなんだろう？
これがわかったのは、大学生になって、内田百閒先生の「阿房列車」を読んだとき。

「子供の頃、うみのあなたにうすがすむという歌詞を聴いて、東国には猿蟹合戦の臼のようなものが住んでいるのだろうと思っていたが、長じて東海道線で上京してみたら、海の向こうに山が薄く霞んで見えるということだった」

ア、ハ、ハ。
わかってみると、なぁーんだ。
百閒先生、私と同じだったんだ。

10.24　トリコロールとひなげしの花

10 月 24 日は、フランスの三色旗が制定された日だそうです。

三色（トリ・コロール）は、青、白、赤。これは、町角のフランス料理店のどこにでも掲げられていますから、殆どの人は知っています。
時代によって、青、白、赤の順番が、赤、白、青になったりしたこともあったみたいだけれど。

青は自由、白は平等、赤は博愛を表しているというのもかなり知られていることですが、これは俗説。赤と青は、パリ市の紋章の色、白はブルボン王朝の白百合の色というのが、正確なところらしいです。

これとは別に、三色の色は、赤がヒナゲシの花の色、白はマーガレットの花の色、青は矢車草の花の色と言われているようです。

特に、赤のヒナゲシはフランスの代表的な花で、丘一面ひなげしの花という光景は、クロード・モネの有名な絵にモネ夫人と子供がヒナゲシの丘を散策しているものがあるところからも知られていますし、与謝野晶子が、「ああ皐月（さつき）　仏蘭西（フランス）の野は火の色す　君も雛罌粟（こくりこ）われも雛罌粟（こくりこ）」と詠ってもいます。

ところで、この「ヒナゲシ」なんですが、日本語ではいろんな名前で呼ばれていて、「雛芥子（ひなげし）」のほかに、今どきは「ポピー」、古いところで「虞美人草」、フランス語そのまま「コクリコ（雛罌粟）」。みんな同じです。

垓下の戦いに敗れ、四面楚歌のなかで、愛する虞姫に「**虞や虞や汝をいかんせん**　（虞兮虞兮柰若何）」と涙する英雄項羽は、若い頃の私の胸に響きました。
虞美人草は、自刃した虞姫の墓に咲いた伝説の深紅の花です。

さて、昔々、アグネス・チャンが若い頃、歌って流行った「丘（オッカ）の上　ひんなげしの花…」で始まる「ひなげしの花」ですが、
私は、この歌をはじめて聞いたときから、この歌詞にはおかしなところがあると思っていました。

どこが？

それは、この歌のなかで、花びらをひとつずつ千切って占うところがあります。

♪　丘の上　ひなげしの花で
　　占うの　あの人の心
　　「来る、来ない、帰らない、帰る」♪

しかし、しかしデス。私の知る「ひなげし」には、花びらは 4 枚しかない。
これでどうして占うことができるのか！！

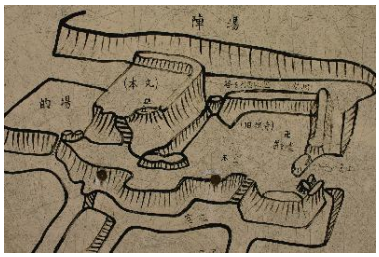
当時、私の犯した致命的過ちは、そのことを付き合っていた女性に言ってしまったことでした。
アグネスのファンだった彼女は、私の方をジロッと見て、「あ、そう。それで…？」
「いや、あのー　べつにー　　」

でも、今でも、私は思うのです。
これは、作詞者の間違いだと。

でも、アグネス・チャンは、今でも、そのまま歌い続けており、
私はと言えば、自分が正しいと確信しつつ、昔々の後遺症のために、今でも、言い出せないでいます。

10.26　荒城の月１

昨日の午後、我が家の近くにある小机城跡を訪れる機会がありました。
小机城跡と言いましても、誰もご存じないと思いますが、横浜市の北部、横浜線沿線にある小高い丘の上にある古い城跡。といっても石垣があるわけではなく、本丸跡をはじめとして、所々にある標識で、あぁこれが空堀の跡かとわかるようなもので、今は、市民の森として保存されています。



1478 年､関東管領山内上杉家の家老だった長尾景春という人物が主家に対して反乱を起こすのですが、この城は、反乱軍側について立て籠もったところ、これを上杉側についた太田道灌が攻め、約 2 ヶ月にわたる血みどろの攻防の結果、落城した歴史を持っています。
太田道灌クンは、この城を攻めるに当たり、

　小机は　まず手習いの　初めにて、いろはにほへと　ちりぢりとなる

という歌を詠んでおり、それが今日まで伝えられています。
私、正直言って、この歌は感心しません。
下手だと思いますし、何より驕った心が見えるような気がします。
道灌クンにはどうもこういう賢しらなところがあって、人徳に欠け、その最後もさもありなんという惨めなものなのですが、この城の攻防戦も、当時の戦いとしては、異例に長い籠城戦になり、太田道灌クン苦戦を強いられます。
この城はこの戦いの後、上杉からこの地を奪った北条氏が城を再興するのですが、1590 年、豊臣秀吉の小田原攻めで、再び落城し、廃城となるという悲運の道を辿りました。

帰り道、一緒に行った方々とＪＲ横浜線小机駅前で、軽い食事をしてビールを飲んで、ホームに上がりましたら、満月に近い月が中天にあり、黒々とうずくまった城跡を冴え冴えと照らしていました。

思わず、荒城の月のメロディーが浮かんだのは、500 年以上も前に、こんな長閑な落ち着いた風景の中で、血みどろの戦が行われたと聞いたからでしょうか。

ところで､「荒城の月」は、我が国の歌曲の中の名曲中の名曲。私たちの世代で、この曲を知らない方はいないと思うのですが、この「荒城の月」の曲が、どの城をイメージして作られたかについては、必ずしも確定しておらず、これまでに多くの議論が行われていることはご存知の通りです。

現在、全国で、荒城の月の碑が建てられている場所は、5 箇所。
仙台青葉城、会津若松鶴ケ城、豊後竹田の岡城、富山城、岩手県二戸市の九戸城です。

このうち、皆さんはどの城が最もふさわしいと思いますか？

この曲の作詞者土井晩翠は、ご承知の通り、仙台出身で、その生涯の多くを仙台で過ごしていますし、土井晩翠自身も作詞に当たって仙台青葉城の佇まいをまず思い浮べたと述べています。
青葉城は、伊達 62 万石にふさわしい名城で、美しい蔓匍う城壁など、荒城の月にふさわしい佇まいが見られるのですが、残念なことに、青葉城は、いわゆる落城の歴史がありません。また、この城で戦闘が行われたこともありません。

私は、荒城の月の歌詞の中には、実戦、特に落城のイメージが存在するように思えてならないのですが、もし、そうだとすれば、青葉城は、最も基本的なところで、荒城の月の城としてのイメージに欠けるところがあると言わざるを得ません。

東北の名城のなかで、落城のイメージが強いのは、なんと言っても会津若松城だと思います。土井晩翠は学生時代、会津若松鶴ケ城を訪れ、戊辰戦争の悲史にこころ惹かれ、この城をイメージにこの詩を作詞したと語っている事実があります。このことも考え合わせると、その当時石垣のみが残されていた会津若松城は、この歌詞にふさわしい城であったような気がします。

ところで、青葉城と鶴ヶ城が作詞家土井晩翠の視点からのものであるのに対し、この詩をもとに作曲を依頼された滝廉太郎の視点からは、豊後竹田の岡城があげられます。

1891 年～1894 年までの少年時代を竹田で過ごした滝廉太郎にとって、維新後廃城となって石垣のみが残る岡城は、土井晩翠の詩に最もふさわしい城と写ったに違いありません。
滝は、1900 年、ドイツ留学を前に、竹田に帰省し、この曲を書き上げるのですが、滝の脳裏にあったのは、間違いなく豊後竹田岡城だったと考えられます。

岡城に残された美しい石垣と日本の音 100 選に選ばれる岡城趾の「松籟」は、古城として荒城の月にふさわしいと思われます。
この岡城も落城の歴史はありません。しかし、1586 年、島津軍 3 万余に対して、僅か 1000 の手勢でこれを守りきった激戦の歴史を持った城は、やはり仙台青葉城とは違ったイメージを持っています。

滝廉太郎は、ドイツに留学してまもなく発病し、帰国を余儀なくされ、帰国後この世を去ります。享年 23 歳。
若くして逝った天才作曲家の悲運は、今も、荒城の月のイメージに大きな影響を与えていると思います。

10.27　荒城の月２…植うる剣

荒城の月の続きです。

「荒城の月」は、ご承知の通り、1 番の春高楼の花の宴に続いて、2 番は秋の陣営の光景が歌われます。

♪　**秋陣営の霜の色**
　　なきゆく雁の数見せて
　　植うる剣(つるぎ)に照り沿いし
　　昔の光今いずこ

ところで、この歌詞から、あなたが思い浮かべる情景はどのようなものでしょうか？
①　戦い前夜、戦さの準備が整い、静まりかえり、研ぎ澄まされた空気に包まれた城の情景
②　出陣直前の張り詰めた空気の中で、城兵たちが剣をかざして意気を高めている情景
③　激しい戦さが終わり、静けさを取り戻した城内の情景
④　その他

実は、専門家の方々の中でも意見が分かれているようなのですが、その原因は、歌詞の中にある「植うる剣（つるぎ)」という言葉にあるようです。

「植うる剣」というのは聞き慣れない言葉ですが、昔、荒城の月を歌ったとき、どういう意味だと思っていました？
意味など考えたことがない！？

まあそうですね。
私も、活字で歌詞を見たときにはじめて、これどういう意味？　と疑問に思ったのですから、歌っているときにはわかりませんよね。

出陣を前に、城兵達が抜きはなった刃を天に向かって突き上げている様子と捉えるのが②

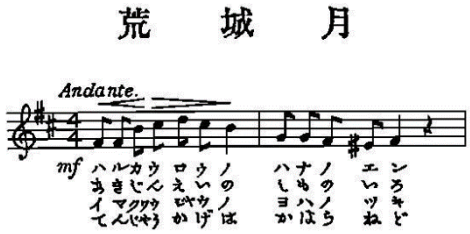
白刃の切っ先を地面に何本も突き刺して、白兵戦に備えている様子と捉えるのが①
防禦のため城壁に逆茂木のように刃を植え込んだ様子などとするものも①
そのほか剣の置かれている状況をどう考えるかで（例えば、戦い止んで、敗れた城内に、倒れた兵士とともに、血濡れた剣が地面に交差して突き立てられている様子③）
まあ、このように解釈が分かれているようなのですが、さて、あなたは、どの情景が一番合っていると思われますか？

私はどの説も何かすっきりしないものを感じますが、強いてというなら③でしょうか。
でも、こんなことを思い浮かべていると、折角の美しい光景も台無しです。
こんなややこしいことは、専門家という方々に任せておくのが一番。
それにしても、土井晩翠先生、どこの城をイメージして歌詞を作ったかより、歌詞の内容をはっきり書いて置いてもらったほうが、馬鹿な後輩達には良かったんですがね。

さて、私が「荒城の月」のなかで一番心うたれるのは、
♪　**天上影は變らねど**
　　榮枯は移る世の姿
のところです。

もちろん、「影」は月の光のことですが、先日も、秋の月の影は小机城趾を変わらず照らしていました。

ところで、滝廉太郎作曲の荒城の月の原曲は、冒頭から数えて 11 音符目に♯がついている（写真）のですが、ご存じでしたか？



春高楼の花の宴の「えん」の「え」の部分です。
上記の天上影は變わらねどの「ね」のところにも、♯記号は付けられているのですが、今普通に歌われているもの（山田耕筰編曲）にはついていませんし、私が小学校で歌った「荒城の月」にも付いていないのです。
これは、滝廉太郎の作った曲を、山田耕筰が編曲したときに、無断で♯記号を削ったというのが事実のようですが、編曲者のこうした独断が、今日「荒城の月」のイメージを変えていることは残念なことです。

もし、お家にピアノなどがあるのなら、是非、弾いて、聞き比べて見ればいかがでしょうか。

11.2　白秋忌

北原白秋は、詩作、歌作、童謡作詞、翻訳といろいろな分野で活躍しましたが、今の方々には、童謡の作詞家として、一番知られているのではないかと思います。

しかし、白秋が世にデビューしたのは詩人としてです。明治の終わり、白秋は新進気鋭の詩人として、「邪宗門」などの多くの詩作を発表し、世の絶賛を浴びます。

あかき林檎　（詩集「思い出」明治 44 年）

いと紅き林檎の實をば
明日こそはあたへむといふ。
さはあれど、女の友は
何時もそを持ちてなかりき。
いと紅き林檎の實をば
明日こそはあたへむといふ。

この詩を、島崎藤村の「初恋」の林檎と比べてみると、林檎が象徴している意味の差に気付かざるを得ません。藤村の初恋から 15 年後のことです。

この詩から暗示されるように、白秋は詩人としての絶頂期に、隣人の妻との姦通罪で告訴され、獄につながれるのですが（明治 45 年）、彼に同情すべき点があるものの、私は、この時期の詩作にどことなく幽かに腐敗臭のようなものを感じてしまうのです。

名声を失い、実家の破産、離婚と続くどん底を経て、白秋がようやく自らの道を見出すのは、鈴木三重吉の「赤い鳥」の場を借りて数々の童謡を発表しはじめてからです。

「ペチカ」、「この道」、「ゆりかごの歌」、「砂山」、「からたちの花」など、私たちの年代は、そのどれもを一度は聞いたことがあり、歌ったこともあるのではありませんか。

からたちの花

♪　**からたちの花が咲いたよ。**
白い白い花が咲いたよ。
からたちのとげはいたいよ。
青い青い針のとげだよ。
からたちは畑の垣根よ。
いつもいつもとほる道だよ。
からたちも秋はみのるよ。
まろいまろい金のたまだよ。
からたちのそばで泣いたよ。

みんなみんなやさしかつたよ。
からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

白い花が咲き、棘に刺され、まろい実がなる。
「みんなみんなやさしかったよ」とうたう白秋に　私は、彼の心が漸く癒されたことを感じます。

ところで、白秋が「まざあ・ぐうす」の翻訳者であることをご存知でしょうか。

童謡作詞者としての白秋は、日本各地のわらべ歌の収集だけでなく、イギリスに古くから伝わる童謡と童話からなる「マザー・グース」の翻訳をも試みているのです。
「ロンドン橋落ちた」「キラキラ星」「メリーさんの羊」「10 人の黒人/インディアン」
「ハンプティ・ダンプティ」等々

そうそう、サイモンとガーファンクルが歌って有名な**スカボロー・フェア**（*Scarborough Fair*）も、「マザー・グース」の中にあるのです。

Are you going to Scarborough Fair?	（スカボロー・フェアに行くのなら）
Parsley, sage, rosemary and thyme,	（パセリ　セイジ　ローズマリー＆タイム）
Remember me to one who lives there,	（どうかある人を訪ねて欲しい）
For she once was a true love of mine.	（わたしがかつて愛した人を）

私には、この「恋歌」の中で、繰り返し歌われる（パセリ　セイジ　ローズマリー＆タイム）の意味が今でもよくわかりませんし、絶対にできないことを昔の恋人に求めるこの歌の歌詞自体、よく理解できないのですが、
白秋が、どういう気持ちでこの恋の歌を眺めたのか、向こうに行ってお会いできたら聞いてみたい気がします。

白秋は、今から 70 年ほど前の昭和 17 年の今日、亡くなっています。享年 57 歳でした。

11.3　利休ねずみの雨

誰もが知っている「城ヶ島の雨」は、白秋が、姦通罪で逮捕され、その名声が地に落ち、追い打ちをかけるように、郷里柳川の実家が破産し、離婚等の不幸が相次ぎ、貧困にあえぐ生活と失意の中で作られたものです（大正 2 年）。

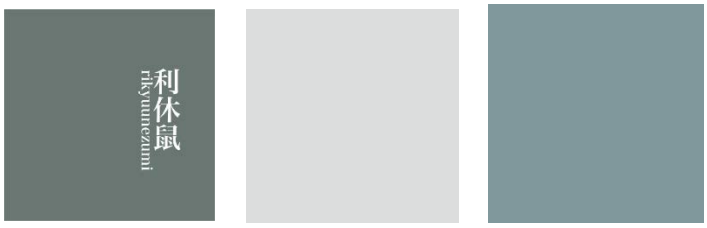
♪　雨はふるふる　　城ヶ島の磯に　　利休ねずみの　雨がふる
♪　雨は真珠か　　夜明けの霧か　　それとも私の　忍び泣き

「利休ねずみ」というのはどういう色の雨なのか、知らなかった私は、大学の図書館で「日本の傳統色」をひいてみて、この色の雨がどういう雨なのかを確かめてみたことがあります。

日本の伝統の色の中に、「鼠」という言葉のついている色は、よく知られているものだけでも 30 種余りあります。
この他にも、いわゆる「灰色」に当たる色がかなりありますから、わざわざ「利休ねずみ」という色の雨を使った白秋は、何らかのこだわりを持っていた可能性があるのではないかと私は思いました。

しかし、文学にも、色彩・デザインにも専門的知見を持たない素人の私にとって、これはなかなか難しい課題でした。

「利休ねずみ」は、幽かに青みがかかった灰緑色で、英訳すると「*Celadon gray*」、つまり青磁のねずみ色です。



この詩の第 2 フレーズに「雨は真珠か　夜明けの霧か」というところがありますが、
私がここから想像していた利休ねずみの色は真珠色でした。
事実、灰色の中には、「*Pearl gray*」（パール･グレイ　白鼠色）という色があって、雨の色を表すには、普通ならこの白鼠色が適切ではないかと思います。上の真ん中。

どうして白秋は、こちらの色をとらなかったのか。
もちろん、「白鼠の雨」では詩にはならないのでしょうが、「利休ねずみ」に近い灰色の中には、「湊(みなと)鼠（*Aqua gray*)」という色もあって、こちらの方がやや白鼠に近いのです。上の右。

にも関わらず、白秋は「利休ねずみ」にこだわった？　なぜか？

私には、「利休」という言葉のイメージ、すなわち、無実にもかかわらず、死を賜らざるを得なかった「利休」を、白秋は自らの運命と重ね合わせていたのではないかという気がしてなりません。

湊鼠色や白鼠色が、どちらかと言えば、やや明るい灰色なのに対して、傷心の白秋が自らのこころを表すには、利休ねずみの明るさに欠けた冷たい灰色の方が、よりふさわしい色と思えたのかも知れません。

専門の文学者の方から見れば、笑止のことかも知れないのですが、素人の私は、そのとき自分の出したこの結論に納得しました。

私には、この歌を境にして、白秋の詩は、優しさを増していくような気がします。

そして、この後今日まで、白秋の童謡詩がこよなく愛されるようになるのは、この挫折と決して無関係ではないのではないかと思っています。

3.25　椿姫

昨日、久しぶりに歌劇を観に(聴きに)行ってきました。

歌劇は歌劇でも、宝塚ではありません。
一応、二期会の歌劇「椿姫（La Traviata)」。

実は私、日本の今の歌劇、あんまり好きじゃないんですね。
じゃあどうして。
今回､私の贔屓の神奈川フィルが演奏したからで､たまには歌劇も良いかなと思っただけ。
今にも雨が降り出しそうな横浜でしたが、東急東横線が、元町から渋谷を経由して和光までつながったせいか、元町付近はかなりの人出でした。

さて、今回の椿姫は、ヴェルディ生誕 200 年を記念したものだったのですが、正直な感想は、椿姫ことヴィオレッタを別にすると、まあ良かったような気がします。

え、どういうこと？
う～ん、世界の至る所で大活躍の日本の女性ですが、残念なことに、オペラの世界ではどうもいけません。

今回のヴィオレッタ姫、声に艶とはりがない。
第三幕の暗い歌はなんとか聞けるのだけど、第一幕の夜会の享楽場面ではどうしようもない。
「ああ、そは彼の人か」を歌うヴィオレッタの乱れる心が伝わって来ないのです。
椿姫のヴィオレッタは、やはり難しいのだということを思い知る結果となりました。

ご存じのように、椿姫は、原作がアレクサンドル･デュマ、原作名は（La Dame aux Camelias　椿を携える女)。
一方、歌劇の作曲は、ジュセッペ・ベルディ、オペラの題名は（La Traviata　道を踏み外した女)。

オペラは別として、デュマの小説「椿姫」を読んでおられる方はかなりおられるので、大方のストーリーはご存じの方が多いのですが、お読みになっていない方のために、一言で説明しますと、高級娼婦に恋をした男の一途なこころに人生を賭け、共に暮らすことになった女が、彼の家族のために自分の心を隠して娼婦に戻り、病に倒れて失意のうちに亡くなるというものですね。
省略しすぎかな？

このお話、小説とオペラとでは、第三幕の最後などが随分違うのです。
題名と主人公の名前（小説ではマルグリット、オペラではヴィオレッタ）が違うのは当然

として、主人公の臨終の場面に恋人アルフレードが間に合うかどうかという大事なところも違うので、最後の場面、瀕死の主人公の歌う歌のニュアンスも微妙に難しい。
今回は、舞台の上に横たわるヴィオレッタと死を前に戻らぬ日々を嘆いて歌うヴィオレッタと二人のヴィオレッタを登場させ、臨終に間に合ったのが幻想とも思える演出がなされていました。

さて、そんなことはさておき、もう一つ、こりゃダメだと思ったのは、ヴィオレッタの演技。
主人公ヴィオレッタは、パリの貴族達を相手とする高級娼婦。
この役は、歌唱の能力だけではなく、高い演技力が要求されるのですね。

でも第一幕のヴィオレッタの所作に、色香も気品も全く感じられない。
吉原の太夫と同じように、どこの国でも支配層を相手にするトップクラスの高級娼婦には、美貌だけでなく、知性、機知、品性が必要なことは当然なんですね。

第二幕のヴィオレッタは、娼婦を辞めて、アルフレードの妻として、清楚で、夫に尽くす清純な女性。

第三幕のヴィオレッタは、瀕死の女性。悔恨と無念、取り乱した心と悟り、絶望と喜び。
こういう女性の心の動きをほんの少しの動きで表すことを期待されます。

オーケストラをバックに突っ立って歌うだけのソプラノ歌手では、つとまらないのですね。

ちなみに、椿姫の DVD は沢山出ているけれど、私のイチ押しは、エディタ・グルベローヴァのヴィオレッタ。
美しさでは、アンジェラ・ゲオルギューのヴィオレッタに劣るかも知れないのですが、歌と表情と所作では、圧倒します。

ということで、言いたい放題、今回の二期会の椿姫を罵倒しているかのようですが、神奈

川フィルの演奏は大変素晴らしかったし、アルフレード役のフェルナンド・ポリターリという歌手も大変良かったので、半分満足して、中華街で肉まん食べて帰りました。

あ、そうそう、一つ、言い忘れたこと。
椿姫というのに、今回の演出では、主人公の髪にも胸にも椿の花が見えなかった。

原作に拘る私には、マルグリット(ヴィオレッタ)が 1 ヶ月のうち 25 日は白い椿、残る 5 日は赤い椿を身につけていたのが「椿姫」の謂われである以上、オペラでも、ヴィオレッタに椿の花を身につけていて欲しいと思うし、それが赤いのか、それとも白いのか、興味があるのですがねぇ。